

「石川角次郎と『聖学の院』」

ヨハネによる福音書 8 章 32 節

人文学部チャプレン 柳田 洋夫

今日は、1906 年に開設された聖学院中学校初代校長として、この聖学院の基礎を形づくった石川角次郎についてお話をしたいと思います。

さて、角次郎先生は、ある文章の中で、「聖学院」という学校の名の由来について、このように言っています。「我等はこの学園を『聖学院』と名づけた。その意義は、聖なる学院ではなく、聖学の院である。聖学とは聖人の学である。聖人の学とは、聖人の教をを学ぶばかりでなく、学んで聖人となるのである。されば本校の理想は聖人を養成することである」。聖学院とは、「聖学の院」であるということなのですが、この「聖学」という言葉はちょっと耳慣れないかもしれません。

「聖学」とは、山鹿素行などの儒学者が強調した学問のあり方ですが、角次郎先生は、中江藤樹という陽明学者に基づいて「聖学」とは何かについて述べています。それによると、藤樹は、11 歳の時に『大学』という書物を読んで大いに感激しました。そして、人間は「聖人」とならなければ生きていても意味はない、同じ人である以上は、一生懸命学問をして、正しい道を行くならば、誰でも孔子や孟子のような聖人になれるはずだ。自分も聖人になろう、と固く覚悟を決めました。そして、藤樹は、学問を研鑽し、徳を修め、ついに近江聖人とと言われるまでの人物になったといえます。

このように、「聖学」とは儒教にもとづく考え方で、「聖人になるための学問」ということです。それでは、「聖人」とは何か。角次郎先生は、孔子の有名な言葉、「われ十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳従う。七十にして心の欲するところに従いて矩をこえず」に基づいて、聖人とは、学問と徳を修めたその極致において、「心の欲するところに従いて矩をこえず」という境地にまで達した人のことを言うのだと述べています。つまり、自分の思い通りにふるまいつつも、守るべき事柄にそむくことがなくなった、という、あの孔子が七十歳にして到達した、ある意味最高の自由の境地に達した人、それが聖人であるというわけです。

しかし、角次郎先生は、孔子的自由をもってそれでよしとされたわけではありません。先生は、ヨハネによる福音書第8章32節の、「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする」という聖書に記されたイエス・キリストの言葉に基づいて、このような自由を得た人こそが聖人なのだ、と言われます。この言葉は、本学の図書館の入り口にもギリシア語で掲げられています。ここでイエスさまが言われている「真理」とは、イエス・キリストご自身のことです。イエスさまは、あるときこう言われました。「わたしは道であり、真理であり、命である」(ヨハネ14:6)。まさに、イエス・キリストご自身が道であり、真理であり、命なのであって、そのようなイエス・キリストにつながっていること、それがそのまま、真理に触れ真実を知ることなのですから。そして、そのことによって、私たちは罪の奴隷であることをやめて、ほんとうに自由な人間とされる、そのようにイエスさまは言われています。となると、角次郎先生の

言われる聖人というのも、究極的には、イエス・キリストという真理につながることによって自由にされた人、すなわちキリスト者ということになるでしょう。そういう意味で、角次郎先生の言われる「聖人」という言葉には、儒教のとらえ方を越えた、新しい理解が込められていると言えます。このような、イエス・キリストにつながることによって真理を知り、ほんとうに自由な人とされるという、その「聖人」理解ならびに「聖学」理解は、今も、そしてこれからも聖学院が大事にしていくべきものであると言えるでしょう。

少々お話が込み入ってしまったかもしれませんが、角次郎先生は、このようにして、イエス・キリストにつながる新しい人を育てることに生涯を捧げた教育者であり、伝道者でした。しかし、そもそも先生は、法律学を志していた人でした。ところが、キリスト教に触れて、一生懸命聖書を読み、また、植村正久など優れた信仰の導き手との出会いが与えられたことによって、一つの「心の革命」が先生の中に起きました。それは、「人を治める学問」よりも「心を治める学問」に、もしくは「人を救うべき道」に進むべきだという思いが与えられるという体験でした。そこで法学部に進むことを止め、その生涯をキリスト教の伝道と教育に捧げる決意をしました。そして、明治 20 年、単身アメリカに渡り、キリスト教や英文学などの勉学に励みました。その後、日本で、東京専門学校や明治女学校などで英語を教える一方、伝道に励む日々を送りました。そして、明治 30 年には、学習院の教授に就任しました。先生は、そこで、皇族たちの家庭教師的な役割も果たしました。また、その間、神道の信仰を持っていた父と母、そして兄弟をみなキリスト教に導きました。

そして、1903(明治 36)年のことですが、ハーヴェイ・H・ガイが聖学院神学校を設立したとき、ガイ博士に乞われて、学習院教授の職を捨てて、これに参加し、主任教授としてキリスト教を教えました。そして、1906(明治 39)年、聖学院中学校が開設されると、その校長として、先頭に立って教育と伝道と教育に当たったのです。

当時は日露戦争の直後であって、国家主義が一層の高まりを見せていた時代でした。キリスト教にとっては逆風の時代です。そうした時代に敢えてキリスト教教育を行うことには大きな勇気を要したこととされます。その勇気の基となっていたのは、ガラテヤ人への手紙第2章20節に記されている御言葉でした。「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである」。この思いが角次郎先生を支え続けました。先生は、キリスト教の教育と伝道に文字通り生涯を捧げつづけて、1930年12月29日、この世における63年の歩みを終えられましたが、その葬儀において、ガイ博士は、追悼の辞でこのように述べています。「石川先生はキリストの弟子である。…キリスト教のために総ての時と身とを捧げて己れの生命を顧みるに足らざるものとし、ただただキリストの御心を心として、その聖霊と融和して、『吾れ生くるにあらず、キリスト吾れの中にあつて生くるなり』とっておられました。従って彼の宗教は、言葉の宗教でなく、理屈の宗教でなく、生命の宗教、行いの宗教でありました。「吾れ生くるにあらず、キリスト吾れの中にあつて生くるなり」というのは、もちろん、今紹介したガラテヤ書の御言葉ですが、このような堅い信仰と熱い思いが、角次郎先生をこの「聖学院」たる聖学院におけるキリスト教教育へと向かわせたのだと言ってよいでしょう。

ここまで、石川角次郎の生涯と聖学院における大きな働きについてお話をしてきました。しかし、ただ昔の人の話をした、ということだけで終わらせたくはないと思います。最後に申し上げておきたいのは、角次郎先生を導かれた神さまの愛と恵みは、ここにいる私たちすべてにも同じように与えられていると

ということです。そして、私たちをも日々導いてくださっているということです。その、神さまの限りない愛の導きを、いつも覚えて、これからも共なる歩みを続けていきたいと思えます。

2023年10月11日 聖学院大学 全学シリーズ礼拝「聖学院120周年を覚えて」